

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

子規せいといい、漱石そうせきというと、私たちはどうも鬱うつ然ぜんたる大家を想像しがちである。しかし彼らは、子規であり漱石であるよりさきに正岡常規まさおかつねのりであり夏目金之助きんのすけであった。私は少くとも学生時代の二人を語る場合、雅号を用いる習慣をやめたほうがいいと思う。そうすれば彼らは、固定した大家のイメージから解放されて、まだなにを生涯の仕事にしたらいいか決めかねている青年のなまなましさを回復することができるのである。

一 昨年さくねんの暮くれ以来、延々と漱石伝を書きつづけているうちに、私は第一高等学校（大学予備門）から東京帝国大学文科大学を通じての正岡常規と夏目金之助の交友が、ほとんど富永太郎（あるいは小林秀雄）と中原中也ちゅうやのそれに匹敵するくらい興味深いものであることに気がついた。無論正岡と金之助とのあいだには、小林と中原の場合のようないひとりの女性をふたりで争うというようなどラマは展開されない。

1 そこには、緊張と深みとにおいてそれに少しも劣らない精神の葛藤かっとうが存在し、明治時代の青年特有の率直さで表現されるので、あたかもふたりが私たちの共通の友人であるかのような身近さでその触れ合いと疎隔そかくとを感じとることができる。

それはひと口でいえば、地方出身の青年と都会生れの青年とのあいだに生じる相互牽引けんいんと反撥はんぱつとの劇である。そこには

2

知性の次元における攘夷派じょういついと開国派の対立があり、ふたつの狂気の中からみあいすらがある。正岡と金之助とのどちらがよりすぐれた人物であったかを、軽々しく判定するつもりは私にはない。だが彼らは、決して大家のようにではなく迷いつつある青年として交際し、競争し、ときには憤った。それは決して両文豪青春のひと幕というようなものではなく、おそらく無数に存在したにちがいない同じような葛藤の、もつとも輪郭鮮明な一例である。

正岡の最初の志望は政治家になることであつた。

3

「朝に在りては太政大臣となり、野に在りては国会議長となろう」というのが上京して来たときの彼の野心である。この正岡の政治家志望を、伊予松山いよまつやまにもおこっていた自由民権運動に結びつけて考えようとするのは、視野狭少な現代解釈にすぎない。

私はだからといって正岡がいやしい青年だったというつもりは少しもない。「立身出世」が公式には否定され、青年の向上欲が内向して陰湿な屈折を示している現代の状況を考えれば、正岡の野心には 4 すがすが 清々しいところさえあるからである。彼はすくなくとも自分の欲しているものがないのであるを知っている。そういう青年が予備門にはいり、哲学と審美学に興味を持ちはじめようになるが、それは決して彼の頭脳が緻密ちみつで論理的にできていたためではない。この場合の哲学とはハーバート・スペンサーであり、「文明開化」を裏付ける流行思想として関心を惹ひいたのである。そして審美学は、文芸趣味のあるこの青年が、哲学と詩歌や美術とをつなぐ鎖として発見したものである。

（江藤 淳「青年正岡常規」による）

問

1

3

4

に入る最も適当な言葉

を、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい
(同じ記号は一度しか使えません)。

ア また

イ つまり

ウ しかし

エ むしろ